

令和7年度第5回 感染症発生動向調査協議会

令和7年8月20日

月番：加藤 達雄

高橋 義人

1 前月の感染症発生動向について（2025年第27週～31週・7月）

<全数把握対象疾患>

- ・結核は34例の報告があり、若年者と高齢者の2峰性の分布がみられている。累計では対前年101.1%と前年からの減少みられず、これまでの減少傾向が鈍化している。
- ・梅毒は27例（早期顕症23例、無症候4例）の報告があり。女性は20～30代の若い世代にみられるが、男性は広い年齢層でみられる。
- ・百日咳は、193例と多く報告され、累計で対前年21933.3%と著増している。10才代に多くみられるが中高年からも報告がみられている。

(STI)

- ・梅毒；男性・女性ともに患者数が増加—“増加率”が上昇している。
2023年度 2024年度の患者総数は143例・140例でほぼ変化なし。現在の状況を年間数に換算すると200例を超えることになる。風俗に関連（利用もしくは従事）した患者は 男性で減少傾向（47.4%～48.5%が、38.1%）。 感染機会が多様化している。
また、年齢分布では20歳代～30歳代の患者の増加が目立つ。
- ・後天性免疫不全症候群；患者数は少なく、すべて無症候性キャリア。感染源の推定が難しい。

<定点把握対象疾患>

- ・新型コロナ感染症は、週ごとに増加傾向があり、高齢者を含め広い年齢層から報告がみられている。
 - ・伝染性紅斑は、対前年でも64279.6%と流行がみられ、対前月159.5%と増加している。
- (STI)
- ・性器ヘルペスウイルス感染症・尖圭コンジローマ・淋菌感染症は前々年・前年と比較して同様もしくは減少している。
 - ・性器クラミジア感染症は 女性の症例が前々年・前年と比較して増加している。

2 検討すべき課題

- ・百日咳の流行について。
- ・梅毒；感染機会が不詳・不明な症例が多い。プライバシー保護は重要事象であるが、県民全体に対する予防医学も大変重要な事象である。確実な全数把握できているか？
定点把握に参加している医療機関からの情報では、梅毒という病名を告知されても驚かない患者が増加している。梅毒の危険性を知らないだけでなく、梅毒を知らない人がいる。
- ・性器クラミジア感染症は、淋菌感染症と比較して症状が軽微であり、女性の場合はさらに症状が顕在化しにくい。症状があつて医療機関受診となった症例が増加しており、背景として医療機関を受診していない症例が多い可能性が危惧される。

あわせて非淋菌・非クラミジア感染症が増加している可能性が危惧される。現状では難治性クラミジア感染症治療の経過中に治療困難症例として把握される症例である。

3 情報提供（月番委員専門分野から）

- ・毎年 9 月 24 日から 30 日「結核・呼吸器感染症予防週間」

<検討結果>